

# So In Love

## ソー・イン・ラブ

### John Di Martino's Romantic Jazz Trio

#### ロマンティック・ジャズ・トリオ

1. 朝日のようにさわやかに  
Softly As In A Morning Sunrise 《S. Romberg》(6:07)

2. ミシェル  
Michelle 《J. Lennon》(3:37)

3. 衣装をつける ~ オペラ 道化師 "おじ  
Vesti La Giubba 《R. Leoncavallo》(2:28)

4. 嘆きのボリンカーノ  
Lamento Borincano 《R. Hernandez》(6:11)

5. ソー・イン・ラブ  
So In Love 《C. Porter》(5:09)

6. ラブ・イズ・ストロンガー・ザン・アス  
Love Is Stronger Than Us 《F. Lei》(6:39)

7. 愛をみつめて  
When I Look In Your Eyes 《L. Bricusse》(6:30)

8. サマータイム  
Summertime 《G. Gershwin》(6:52)

9. モーメント・トゥ・モーメント  
Moment To Moment 《H. Mancini》(4:03)

10. ハッシャバイ  
Hush A Bye 《Trad》(5:51)

11. これからの人生  
What Are You Doing The Rest Of Your Life 《M. Legrand》(5:56)

12. 愛のささやき  
Murmullo 《H. Rosell》(4:54)

**ジョン・ディ・マルティーノ** John Di Martino (piano)

**アイラ・コールマン** Ira Coleman (bass)

**グラディ・テイト** Grady Tate (drums)

録音：2004年9月9、10日　アヴァター・スタジオ、ニューヨーク

© 2005 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

\*

Recorded by David Darlington  
at Avatar Studio in New York on September 9 & 10 , 2004.  
Assistant ; Peter Doris.  
Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound :  
Shuji Kitamura and Tetsuo Hara.  
Front Cover Photo : © Irina Ionesco / G. I. P.Tokyo.  
Artist photos by John Abbott.  
Designed by Taz.

生するイメージをジャズのフレーズで綴ってゆく。このジャズのフレーズというのが大切なのだ。これがジャズのフレーズというフレーズ。初心者はまずこれを好きになるだろう。そしていろいろな曲折を経て、初心に帰り、またジャズのフレーズが好きになるものなのだ。私がそうなのだ。

有名な「ハッシャバイ」を聴いてみる。冒頭ソロに入るところでウエイン・ショーターのフレーズが出てくる。ははあ、と思うのである。ジョン・ディマルティーノはショーターをちゃんと聴いているのだ。それを消化吸収、いや、それを超えてショーター以前の王道ジャズのフレーズを弾き出したのだ。

はっきり言おう。エバンス風、ハンコック風をやってもいまや古い。ああ、またか、と思われてしまう。それよりもだ。オーソドックスこそがいつも新しく古びないのである。

次。音の話。音のいいヴィーナス・レーベルの中でも、このディスクは際立って音がいいと私は思う。

またソフトリーに戻るが、ソフトリーが始まるとグラディ・テイトのハイハット・シンバルの細かく鋭い音が「ジーン」という感じで聴こえてくる。これが実に生々しいのである。ハイハット・シンバルを目の前で聴いているような錯覚に陥る。いや、私のスピーカーから聴こえるこの音は実物よりも気持ちいいのだから、オーディオ・マニアである私はこの音を聴きたくて、このディスクを取り出してしまふのだ。

ベース。私はアイラ・コールマンのベースを眼前で聴いたことがある。新宿の「ダグ」というライブハウスで。とにかく大きいのである。まずベースが通常のベースではなく、ひとまわり大きなベース。大き

な身体で大型のベースを弾く。それが、この音である。ヴィーナス録音の中でもこのベースの音は突出している。おわかりだろう。電氣的に拡大していない。それをする必要がない。根本的に大きいのだ。要するに胴鳴り。ベースの胴体が根本的に本質的に鳴っているのである。だから気持ちいい。本来のベースの音というのはこういう音なのである。

ピアノ。いやま、とにかく響きが美しい。「ラブ・イズ・ストロンガー・ザン・アス」の中間部のシングル・トーンの響き具合にたまげてしまった。ちからが強いのに響きが清澄、そして明瞭度が高い。普通、どっちかになるものだが。

選曲。最近ではピアノの個性より選曲が大事になってきた。曲で聴かせる時代だからである。ようやくジャズも個性より曲で聴いてもいい時代に入ったのである。曲解禁。

曲解禁などと言ってもわからない方がおられるだろう。いいのである。深く考えないでけっこう。

ジャズ・ファンにはよく知れ渡った「ソー・イン・ラブ」や「ソフトリー」「ハッシャバイ」「サマータイム」に混じって「愛のささやき」「ラブ・イズ・ストロンガー・ザン・アス」「愛をみつめて」「嘆きのボリンカーノ」といった曲が入っている。私にとってはこれらの曲がこのディスクにおける財産になった。なんととなれば私の未知の曲だからである。えっ、知らないのか、と言われそうだが、50年ジャズやってても知らないものは知らないのである。

知らないことが私にとっては幸せなのである。なぜなら知る喜びを与えられたからである。

フランス・レイの「ラブ・イズ・ストロンガー・ザン・アス」もこれからどしどし聴いてみたい。じわっと味が浸み出てくる曲だ。バックの遅れがちに聴こえてそこが美味いボレロ風ラテン・リズムに、もう私はズイキの涙である。この手のリズムからジャズの4ビートに入学したので。

南米リズムの中で最も優雅、そして美麗といわれるボレロ・リズムの「愛のささやき」。ブランフォード・マルサリス『エターナル』の1曲目「ルビーとパール」がこのボレロ・リズムだった。今年はボレロの年になりそうではないか。うれしいことである。

「エル・クンバンチェロ」という底抜けに楽しい一曲を作ったプエルトリコのマリン・ラファエル・ヘルナンデスのベンによる「嘆きのボリンカーノ」は、これから好きになってゆくぞーといった旋律を持った曲。ベースが主題を奏でているが、これは正解である。ピアノの打力に優るとも劣らないベースの腕力が強力だからである。ベースというより、なにかもうちょっと強い別の楽器のように私のステレオからは聴こえてくる。

今回の選曲はヴィーナス側から示唆されたものではないらしい。彼ら3人がたくさんの曲を持ち寄り、演奏し、その演奏の中でこれは入れよう、これは捨てようの決定が行われたという。まさしくジャズ的、である。

さあ、今、午前3時10分。ノルマは果たした。

ファクスでコトコトとヴィーナスの会社に原稿を送ろう。仕事聴きは終わりだ。今度はファン聴きだ。

トントんと階下に下り、近頃気に入っている国産のワイン、ちょっと甘めの「アディロンダック」を3杯ほどひっかけることにしよう。

甘めといえばこのディスク、『ロマンチック・ジャズ・トリオ』の名が付いているが、それは表面の名目だけ。芯は甘くない。「アディロンダック」も芯は甘くない。だから長続きするのである。『ロマンチック・ジャズ・トリオ』もそれは同じ。

なんていったって「朝日のようにさわやかに」である。他人はどうか知らないが、今後このCDをライブラリーから抜き出したら真っ先に「ソフトリー」のボタンを押すこと間違いなし、である。

とにかく、元気が出る。元気が出る「ソフトリー」。元気印「ソフトリー」。

冒頭の数音からして、3人でこれからどんどん盛り上げてゆくこうとする意気込みを感じさせる「ソフトリー」も珍しい。さあ、これからおれ達は燃え上がってゆくぜ。心して聴いてくれよ。そんな無言のメッセージが伝わってくるのだ。ピアノ・ソロに入るとソフトリー特有の旋律的に美しいフレーズがピシバシ出てくる。ソフトリー特有と書いたが、ソフトリーというのは誰が弾いても吹いてもなんともしえない美麗なソロが続出するという不思議な曲なのだ。ソフトリー効果。

しかしちょっと、ジョン・ディマルティーノのソロは違う。なんというか、屈折しているのだ。屈折しながら美しい。屈折美。ひねくれソフトリーというと若干ニュアンスが変わってくるが、しかし屈折美を持つがゆえに、このソフトリーは私にとって忘れられないものとなった。

出だしのイントロダクションからして並のソフトリーではない。だからといって並じゃない方向に音楽がそのまま進んでゆくかというそんなことはなく、きちんと聴衆を考えに入れたソフトリーになってゆくところが美しい。塩梅具合がいいのである。塩梅美。そういえば、かつてフリー・ジャズというジャズがあった。塩梅加減を知らずに並ではない方向に進んでしまって身を滅ぼしたのだ。

そうそう、フリー・ジャズといえばヴィーナス・レコードのオーナーはフリー・ジャズからジャズに入所した方である。フリーから始めてオーソドックスに来た方。だからオーソドックスが彼にとって今とでも楽しい。オーソドックスが新しい。であるから、仮にジョン・ディマルティーノがフリー・ジャズっぽくソフトリーを突っ走らせたとしたら、目を剥いてストップをかけたことだろう。そんなことは昔やってくれ、と言って。

ソフトリーの話はこれで終わり。ジョン・ディマルティーノのピアノの話しよう。

諸君は彼が個性的なピアニストだと思うか。私は思わない。ピアニストは、いやジャズ・ミュージシャンは個性的でなくてはいけないのか。認められないのか。そんなことはない、と私は断言したい。

個性でジャズを聴く人もいるだろう。私の周りにあんまり見かけないが。そういう人は個性を大切にしてくっこう。しかし、ジャズは個性がなくては駄目だ、とは言わないでほしい。これ、濃く、正論のように聞こえるのである。妙に説得力があるのである。だから、たまに考え込んでしまう人がいる。私などは今は「あっ、そう」てなものである。あなたは勝手にそう聴けば。私は違う聴き方をするからさ。

ジョン・ディマルティーノがどういう曲を選曲し、選曲した題材をどう処理し、その処理の仕方に個性が出れば、それが私のミュージシャンに求める個性なのだ。前述のソフトリーだって立派な彼の個性表現なのである。ピアノを妙にくせっぽく弾いて、ハイ、これが私の個性ですと言われても……。

弾き方でいえば、彼はビル・エバンスやキース・ジャレットやハービー・ハンコックのようではない。そこがいいのである。さあ、もう一度言おう。そこがジョン・ディマルティーノのいいところである。私が愛するゆえんである。

普通のジャズのピアノだからいいのである。曲を弾き、そこから派